谷崎潤一郎文庫

少将滋幹の母
少年　小さな王国
吉野葛　夢の浮橋
他五篇

六興出版

谷崎潤一郎文庫
第三巻　吉野葛・少将滋幹の母
昭和五十年　五月一日　発　行
昭和五十二年三月二五日三版発行

著　者　谷崎潤一郎
発行者　賀來壽一
印　刷　㈱大日本法令印刷
製　本　㈲手塚製本所
発行所　㈱六興出版
東京都文京区水道二―九―二
郵便番号　一一二
電話〇三(九四三)三四三一
振替　東京　九二四四八

© 1973　MATSUKO TANIZAKI, Printed in Japan.
落丁・乱丁の本はお取り替え致します。

0393-02403-9216

目次

母を恋うる記　三
吉野葛　二五
少将滋幹の母　六七
夢の浮橋　一五九
少年　二〇五
小さな王国　二三五
The Affair of Two Watches　二六三

あくび　二八一
恐怖　三〇三
亡友　三一三
詩人の別れ　三四三
注解　三五七
解説　三七一

（引用文は原文のまま収録——編集部）

監修　谷崎松子
野村尚吾

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

母を恋うる記

いにしへに恋ふる鳥かもゆづる葉の
三井の上よりなき渡り行く
――萬葉集――

……空はどんよりと曇っているけれど、月は深い雲の奥に呑まれているけれど、それでも何処からか光が洩れて来るのであろう、外の面は白々と明るくなっているのである。その明るさは、明るいと思えばかなり明るいようで、路ばたの小石までがはっきりと見えるほどでありながら、何だか眼の前がもやもやと霞んでいて、遠くをじっと見詰めると、瞳が擽ったいように感ぜられる、一種不思議な、幻のような明るさである。何か、人間の世を離れた、遙かな遙かな無窮の国を想わせるような明るさである。その時の気持ち次第で、闇夜とも月夜とも孰方とも考えられるような晩である。しろじろとした中にも際立って白い一とすじの街道が、私の行く手を真直に走っていた。街道の両側には長い長い松並木が眼のとどく限りつづいて、それが折々左の方から吹いて来る風のためにざわざわと枝葉を鳴らしていた。風は妙に湿り気を含んだ、潮の香の高い風であった。きっと海が近いんだなと、私は思った。私は七つか八つの子供であったし、おまけに幼い時分から極めて臆病な少年であったから、こんな夜更けにこんな淋しい田舎路を独りで歩くのは随分心細かった。なぜ乳母が一緒に来てくれなかったんだろう。乳母はあんまり私がいじめるので、怒って家を出てしまったのじゃないかしら。そう思いながらも、私はいつもほど恐がらないで、その街道をひたすら辿って行った。私の小さな胸の中は、夜路の恐ろしさよりももっと辛い遣るせない悲しみのために一杯になっていた。私の家が、あの賑やかな日本橋の真中にあった私の家が、こういう辺僻な片田舎へ引っ越さなければならなくなってしまったこと、昨日に変る急激な我が家の悲運、――それが子供心にも私の胸に云いようのない悲しみをもたらしていたのであった。私は自分で自分のことを可哀そうな子供だと思った。この間までは黄八丈の綿入れに艶々とした糸織の羽織を着て、ちょいと出るにもキャラコの足袋に表附きの駒下駄を穿いていたものが、まあ何という浅ましい変りようをしたのだろう。まるで寺小屋の芝居に出て来る涎くりのような、うすぎたない、見すぼらしい、人

前に出るさえ恥かしい姿になってしまっている。そうして私の手にも足にもひびやあかぎれが切れて軽石のようにざらざらしている。考えて見れば乳母がいなくなったのも無理はない。私の家にはもう乳母を抱えておくほどのお金がなくなったのだ。それどころか、私は毎日お父さんやお母さんを助けて、一緒に働かなければならない。水を汲んだり、火を起こしたり、雑巾がけをしたり、遠い所へお使いに行ったり、いろいろのことをしなければならない。

もう、あの美しい錦絵のような人形町の夜の巷をうろつくことはできないのか。水天宮の縁日にも、茅場町の薬師様にも、もう遊びに行くことはできないのか。それにしても米屋町の美代ちゃんは今頃どうしているだろう。鎧橋の船頭の忰の鉄公はどうしただろう。蒲鉾屋の新公や、下駄屋の幸次郎や、あの連中は今でも仲よく連れだって、煙草屋の柿内の二階で毎日毎日芝居ごっこをしているだろうか。もうあの連中とは、大人になるまでおそらくは再び廻り遇う時はない。それを考えると恨めしくもあり情けなくもある。だが、私の胸を貫いている悲しみは単にそのためばかりではないらしい。ちょうどこの松並木の月の色がわけもなく悲しいように、私の胸には理由の知れない無限の悲しみが、ひしひしと迫っているのである。なぜこのように悲しいのだろう。そうしてまた、それほど悲しく思いながらなぜ私は泣かないのだろう。私は不断の泣虫にも似合わず、涙一滴こぼしてはいないのである。たとえば哀音に充ちた三味線を聞く時のような、冴え冴えとした、透き徹った清水のように澄み渡った悲しみが、何処からともなく心の奥に吹き込まれて来るのである。

長い長い松原の右の方には、最初は畑があるらしかったが、歩きながらふと気が付いて見ると、いつの間にやら畑ではなくなって、何だか真暗な海のような平面がひろびろと展けている。そうして、平面のところどころに青白いひらひらしたものが見えたり隠れたりする。左の方から、例の磯ッ臭い汐風が吹いて来る度に、その青白いひらひらは一層数が多くなって、皺がれた、老人の力のない咳を想わせるような、かすれた音を立てながらざわざわと鳴っている。海の表面に波頭が立つのかしらとも考えたが、どうもそうではないらしい。海があんなカサカサした声を出すわけがない。どうかした拍子には、魔者が白い歯をムキ出してにやにや笑っているようにも見えるので、私はなるべくその方へ眼をやらないように努めた。けれども、薄気味が

悪いと思えば思うほど、やっぱり見ずにはいられなくなって、時々ちらりとその方を偸み視る。ちらり、ちらり、と、何度見ても容易に正体は分らない。ざあーッという松風の音の間から、カサカサと鳴る声がいよいよ繁く私の耳を脅かしている。すると、そのうちに左の松原の向うの遠いところから、ど、ど、どどん――というほんとうの海の音が聞えて来た。あれこそたしかに波の音だ。海が鳴っているのだ、と私は思った。その海の音は、離れた台所で石臼を挽くように、微かではあるが重苦しく、力強く、殷殷と轟いているのである。

浪の音、松風の音、カサカサと鳴るえたいの知れぬものの音、――私は時々ぴったりと立ち止まって、身に沁み渡るそれらの音に耳を傾けては、またとぼとぼと歩いて行った。折々、田圃の肥料の臭いのようなものが何処からともなく匂って来るのが感ぜられた。過ぎて来た路を振り返ると、やはり行く手と同じような松の繩手が果てしもなくつづいている。孰方を向いても人家の灯らしいものは一点も認められない。それに、先からもう一時間以上も歩いているのに人通りが全くない。たまたま出会うのは左側の松原に並行して二十間おきぐらいに立っている電信柱だけである。そうしてその電信柱も、あの波の音と同じようにゴウゴウと鳴っている。私はしょざいなさに一本の電信柱を追い越すと、今度は次の電信柱を目標にして、一本、二本、三本、……という風に数えながら歩いて行くのであった。

三十本、三十一本、三十二本、……五十六本、五十七本、五十八本、……というようにして、私が多分七十本目の電信柱を数えた時分であったろう、遠い街道の彼方に始めて一点の灯影が、ぽつりと見え出したのである。自然と私の目標は電信柱からその灯の方へ転じたが、灯は幾度か松並木の間にちらちらと隠れてはまた現れる。灯と私との間隔は電信柱の数にして十本ぐらい離れているらしく思われたけれど、歩いて見るとなかなかそんなに近くではない。十本どころか、二十本目の柱を追い越しても、灯は依然として遠くの方でちらちらしている。提灯の火ほどの明るさで、じっと一つ所に停滞しているようであるが、しかし或いは私と同じ方角に向って同じような速力で一直線に動きつつあるのかも知れない。……

私が、ようようその灯のある所から半町ほど手前までやって来たのは、それから何分ぐらい、或いは何十分ぐらい後

であったろう。提灯の明るさほどに鈍く見えていたその光は、やがてだんだん強く鮮やかになって、その附近の街道の闇を昼間のようにハッキリと照らしている。ほの白い地面と、黒い松の樹とを長い間見馴れて来た私は、その時やっと、松の葉というものが緑色であったことを想い出した。その灯はとある電信柱の上に取り附けられたアーク燈であったのである。ちょうどその真下へ来た時に、私は暫らく立ち止まって、影をくっきりと地面に映している自分の姿を眺め廻した。ほんとうに、松の葉の色をさえ忘れていたくらいなのだから、もしもこの辺でアーク燈に出遇わなかったら、私は自分の姿までも忘れてしまったかも知れない。こうして光の中に這入って見ると、今通って来た松原も、これから行こうとする街道も、私の周囲五六間ばかりの圏の内を除いては、すべて真黒な闇の世界である。あんな暗い処を自分はよく通って来たものだと思われる。おそらくあの暗闇を歩いた折には自分は魂ばかりになっていたかも分らない。そうして、この明るみへ出るとともに肉体が魂の所へ戻って来たのかも分らない。

その時私はふっと、例のカサカサという皺嗄れたものの音が未だに右手の闇の中から聞えているのに心付いた。白いヒラヒラしたものが、アーク燈の光を受けて、先よりは余計まざまざと暗中に動いているようである。その動くのが薄ぼんやりとした明りを帯びているだけに、却って一層気味悪く感ぜられる。私は思い切って、松並木の間から暗い方へ首を出して、そのヒラヒラしたものをじっと視詰めた。一分……二分……暫らく私はそうして視詰めていたけれど、やはり正体は分らなかった。白いものがつい私の足の下から遠い向うの真暗な方にまで無数の燐が燃えるようにぱっと現れてはまた消えてしまう。私はあまり不思議なので、ぞっと総身に水を浴びたようになりながらも、なお暫らくは凝視をつづけていた。そうしているうちに次第次第に、ちょうど忘れかかっていたものが記憶に蘇生ってくるような工合に、或いはまたほのぼのと夜が明けかかるような塩梅に、その不思議なものの正体がふいっと分って来たのである。その真暗な茫々たる平地は一面の古沼であって、其処に沢山の蓮が植わっていたのである。蓮はもう半分枯れかかって、葉は紙屑かなんぞのように乾涸らびている。その葉が風の吹く度にカサカサという音を立てて、葉の裏の白いところを出しながら戦いているのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それにしてもその古沼は非常に大きなものに違いない。もうよほど前から私を脅かしているのである。全体これから先何処までつづいているのかしらん。――そう思って、私は沼の向うの行く手の方を眺めやった。沼と蓮とは眼の届くかぎり何処までも何処までも横たわっていて、遙かにどんよりと曇った空に連なっている。まるで暴風雨の夜の大海原を見渡すようである。が、その中にたった一点、沖の漁り火のように赤く小さく瞬くものがある。

「あ、彼処に灯が見える。彼処に誰かが住んでいるのだ。あの人家が見え出したからには、もうじき町へ着くだろう」

私は何がなしに嬉しくなって、アーク燈の光の中から暗い方へと、更に勇を鼓して道を急いだ。

五六町ばかり行くうちに、灯はだんだん近くなって来る。其処には一軒の茅葺の百姓家があって、その家の窓の障子から灯が洩れて来るらしい。彼処には誰が住んでいるのだろう。事によると、あのわびしい野中の一軒家には、私のお父さんとお母さんがいるのではないかしら。彼処が私の家なのではないかしら。あの灯の点っている懐かしい窓の障子を明けると、年をとったお父さんとお母さんとが囲炉裏の傍で粗朶を焚いていて、

「おお潤一か、よくまあお使いに行って来てくれた。さあ上がって火の傍においで。ほんとうに夜路は淋しかったろうに、感心な子だねえ」

そう云って、私をいたわって下さるのではないかしら。

街道の一と筋路は百姓家のあたりで少しく左の方へ折れ曲っているらしく、右側にあるその家の明りが、ちょうど松並木のつきあたりに見えている。家の表には四枚障子が締め切ってあって、障子の横の勝手口には、縄暖簾が下がっているらしい。暖簾を洩れる台所の火影が街道の地面をぼんやりと照らして、向う側の大木の松の根本にまで微かにとどいている。……もうその家の一間ばかり手前まで私はやって来た。暖簾の蔭の流し元で何かを洗っているらしい水の音が聞える。軒端の小窓からは細い煙がほのぼのと立ち昇って、茅葺の軒先に燕の巣のようにもくもくと固まっている。今時分何をしているのだろう。こんな遅い時刻に夕餉の支度をしているのだろうか。そう思ったとたんに、嗅ぎ馴れた味噌汁の匂いがぷーんと私の鼻をおそって来た。それから魚を焼くらしいじくじくと脂の焦げる旨そうな匂いがした。

「ああお母さんは大好きな秋刀魚を焼いているんだな。きっとそうに違いない」
私は急に腹が減って来た。早く彼処に行って、お母さんと一緒に秋刀魚と味噌汁で御膳を喰べたいと思った。
もう私はその家の前まで来た。縄暖簾の中を透かして見ると、やっぱり私の思った通り、お母さんが後ろ向きになって手拭を姐さん冠りにして、竈の傍にしゃがんでいる。そうして火吹竹を持って、煙そうに眼をしばたたきながら、しきりに竈の下を吹いている。其処には二三本の薪がくべてあって、火が蛇の舌のように燃え上がる度ごとに、お母さんの横顔がほんのりと赤く照って見える。東京で何不足なく暮らしていた時分には、ついぞ御飯なぞを炊いたことはなかったのに、さだめしお母さんは辛いことだろう。……ぶくぶくと綿の這入った汚れた木綿の二子の上に、ぼろぼろになった藍微塵のちゃんちゃんを着ているお母さんの背中は、一生懸命に火を吹いているせいか、傴僂のように円くなっている。まあいつの間にこんな田舎のお媼さんになってしまったんだろう。
「お母さん、お母さん、私ですよ、潤一が帰って来たんですよ」
私はこう云って門口のところから声をかけた。するとお母さんは徐かに火吹竹を置いて、両手を腰の上に組んで体を屈めながらゆっくりと立ち上がった。
「お前は誰だったかね。お前は私の悴だったかね」
私の方をふり向いてそう云った声は、あの古沼の蓮の音よりももっと皺嗄れて微かである。
「ええそうです、私はお母さんの悴です。悴の潤一が帰って来たんです」
が、母はじーっと私の姿を見詰めたきり黙っている。姐さん冠りの下から見える白毛交りの髪の毛には竈の灰が積っている。頬にも額にも深い皺が寄って、もうすっかり耄碌してしまったらしい。
「私はもう長い間、十年も二十年もこうして悴の帰るのを待っているんだが、しかしお前さんは私の悴ではないらしい。私の悴はもっと大きくなっているはずだ。そうして今にこの街道のこの家の前を通るはずだ。私は潤一なぞという子は持たない」
「ああそうでしたか。あなたは余所のお媼さんでしたか」
そう云われて見ればなるほどそのお媼さんはたしかに私の母ではない。たといどんなに落ちぶれたにしても、私のお

母様はまだこんなに年を取ってはいないはずである。――だがそうすると、一体私のお母様の家は何処にあるのだろう。

「ねえお媼さん、私はまたわたしのお母さんに会いたさに、こうしてこの街道を先から歩いているんですが、お媼さんは私のお母さんの家が何処にあるか知らないでしょうか。知っているなら後生だから教えて下さい」

「お前さんのおふくろの家かい？」

そう云って、お媼さんは眼脂だらけな、しょぼしょぼとした眼を見張った。

「お前さんのおふくろの家なんぞを私が何で知るもんかね」

「そんならお媼さん、私は夜路を歩いて来て大変お腹が減っているんですが、何か喰べさしてくれませんか」

するとお媼さんはむっつりとした顔つきで、私の姿を足の先から頭の上までずっと見上げた。

「まあお前さんは、年も行かないくせに、何というずうずうしい子供だろう。お前はおふくろがいるなんて、大方嘘を云うのだろう。そんな穢いなりをして、お前は乞食じゃないのかい？」

「いえいえお媼さん、そんなことはありません。私にはちゃんとお父つぁんもあればおッ母さんもあるのです。私の家は貧乏ですから、穢いなりをしていますけれど、それでも乞食じゃないんです」

「乞食でなければ自分の家へ帰っておまんまを喰べるがいい。私のところにはなんにも喰べるものなんかありゃしないよ」

「だってお媼さん、其処にそんなに喰べるものがあるじゃありませんか。お媼さんは今御飯を炊いていたんでしょう。そのお鍋の中にはおみおつけも煮えているし、その網の上にはお魚も焼けているじゃありませんか」

「まあお前はいやな児だ。家の台所のお鍋の中にまで眼を付けるなんて、ほんとうにいやな児だ。このおまんまやお魚やおみおつけはね、お気の毒だがお前さんにはやれないのだよ。今に忰が帰って来たらば、きっとおまんまを喰べるだろうと思って、それで拵えているのだよ。可愛い可愛い忰のために拵えたものを、どうしてお前なんかにやれるもんか。さあさあ、こんなところにいないで早く表へ出て行っておくれ。私は用があるんだよ。お釜の御飯が噴いているのに、お前のお蔭で焦げ臭くなったじゃないか」

お媼さんは面を膨らせてこんなことを云いながら、そっけない風で竈の傍へ戻って行った。
「お媼さんお媼さん、そんな無慈悲なことを云わないで下さい。私はお腹が減って倒れそうなんです」
そう云って見たけれど、もうお媼さんは背中を向けたきり返辞もせずに働いている。……
「仕方がない。お腹が減っても我慢をするとしよう。そうして早く家のおッ母さんの処へ行こう」
私は独りで思案をして繩暖簾の外へ出た。
そこで左へ曲っている街道の五六町先には、一つの丘があるらしい。路はその丘の麓までほの白く真直ぐに伸びているけれど、丘に突き当ってそれから先はどうなるのだか、此処からはよく分らない。丘にはこの街道の松並木と同じような真黒な大きな松の木の林が頂上までこんもりと茂っているようである。暗いのでハッキリは見えないが、さあッさあッという松風の音が丘全体を揺がしているので、それと想像がつくのである。だんだん近づくに随って、路は丘の裾を縫って松の間を右の方へ迂廻している。私の周囲には木の下闇がひたひたと拡がって、あたりは前よりも一層暗さが濃くなっている。私は首を上げて空を仰いだ。が、鬱蒼とした松の枝に遮られて空は少しも見えない。頭の上では例の松風の音が颯々と聞えている。私はもう、腹の減っていることも何も忘れて、ひたすら恐ろしいばかりであった。電信柱のごうごうという唸りも蓮沼のカサカサという音も聞えなくなって、ただ海の轟きばかりが未だに地響きをさせて鳴っている。何だか足の下が馬鹿に柔らかになって、歩く度ごとにぼくりぼくりと凹むような心地がする。きっと路が砂地になったのであろう。そうだとすれば別に不思議はないわけだが、しかしやっぱり気持ちが悪い。いくら歩いても一つ所を蹈んでいるようである。砂地というものがこんなに歩きにくいとは今までかつて感じなかった。おまけに、前とは違ってわずかの間に路が何遍も左へ曲ったり右へ折れたりする。うっかりすると松林へ紛れ込んでしまいそうである。私は次第に興奮して来た。額にはじいッと冷汗が滲み出て、胸の動悸と息づかいの激しさを自分の耳で明瞭に聞き取ることができた。
うつむいて、足下を見詰めながら歩いていた私はその時ふと、洞穴のような狭い所からひろびろした所へ出かかっているような気がしたので、何気なく顔を擡げた。まだ松林は尽きないけれど、そのずっと向うに、遠眼鏡を覗いた時

のように、円い小さい明るいものがある。もっともそれは燈火のような明るさではなく、銀が光っているような鋭い冷たい明るさである。

「ああ月だ月だ、海の面に月が出たのだ」

私はすぐとそう思った。ちょうど正面の松林が疎らになって、窓の如く隙間を作っている向うから、その冴え返った銀光がピカピカと、練絹のように輝いている。私の歩いている路は未だに暗いけれど、海上の空は雲が破れて、其処から皎々たる月がさしているのだろう。見ているうちに海の輝きはいよいよ増して来て、この松林の奥へまでも眩しいほどに反射する。何だかこう、きらきらと絶え間なく反射しながら、水の表面がふっくらと膨れ上がって、澎湃と湧き騒いでいるように感ぜられる。

海の方から晴れて来る空は、だんだんとこの山陰の林の上にも押し寄せて、私の歩く路の上も刻一刻に明るくなって来る。しまいには私自身の姿の上にも、青白い月が松の葉影をくっきりと染め出すようになる。丘の突角は次第に左の方へ遠退いて行って、私は知らず識らずの間に、ほとんど不意に林の中から渺茫たる海の前景のほとりに立たされてしまった。

ああ何という絶景だろう。――私は暫らく恍惚として其処に佇んでいた。私の歩いて来た街道は、白泡の砕けている海岸に沿うて長汀曲浦のつづく限りつづいている。此処は三保の松原か、田子の浦か、住江の岸か、明石の浜か、――とにもかくにも、それらの名所の絵ハガキで見覚えのある枝振りの面白い磯馴松が、街道のところどころに、鮮やかな影を斜めに地面へ印している。街道と波打ち際との間には、雪のように真白な砂地が、多分凸凹に起伏しているのであろうけれど、月の光があんまり隈なく照っているために、その凸凹が少しも分らないでただ平べったくなだらかに見える。その向うは、大空にかかった一輪の明月と地平線の果てまで展開している海との外に、一点の眼を遮るものもない。先刻松林の奥から見えたのは、ちょうどその月の真下に方って、最も強く光っている部分なのである。その海の部分は、単に光るばかりでなく、光りつつ針金を捩じるように動いているのが分る。或いは動いているために、一層光が強いのだと云ってもよい。其処が海の中心であって、其処から潮が渦巻き上がるために、海が一面に膨れ出すのかも知れない。何しろその部分を真中にして、海が中高に盛り上がって見えるのは事実である。盛り

上がった所から四方へ拡がるに随って、反射の光は魚鱗の如く細々と打ち砕かれ、さざれ波のうねりの間にちらちらと交り込みながら、汀の砂浜までしめやかに寄せて来る。どうかすると、汀で崩れてひたひたと砂地へ這い上がる水の中にまでも、交り込んで来るのである。

その時風はぴったりと止んで、あれほどざわざわと鳴っていた松の枝も響きを立てない。渚に寄せて来る波までがこの月夜の静寂を破ってはならないと力めるかの如く、かすかな、遠慮がちな、囁くような音を聞かせているばかりである。それはたとえば女の忍び泣きのような、蟹が甲羅の隙間からぶつぶつと吹く泡のような、消え入るようにかすかではあるが、綿々として尽きることを知らない、長い悲しい声に聞える。その声は「声」というよりも、むしろ一層深い「沈黙」であって、今宵のこの静けさを更に神秘にする情緒的な音楽である。……

誰でもこんな月を見れば、永遠ということを考えない者はない。私は子供であったから、永遠というはっきりした観念はなかったけれども、しかし何かしら、それに近い感情が胸に充ち満ちて来るのを覚えた。――私は前にもこんな景色を何処かで見た記憶がある。しかもそれは一度ではなく、何度も何度も見たのである。或いは、自分がこの世に生れる以前のことだったかも知れない。前世の記憶が、今の私に蘇生って来るのかも知れない。それともまた、実際の世界でではなく、夢の中で見たのだろうか。夢の中で、これとそっくりの景色を、私は再三見たような心地がする。そうだ、たしかに夢に見たことがあるのだ。二三年前にも、ついこの間も見たことがあった。そうして実際の世界にも、その夢と同じ景色が、何処かに存在しているに違いないと思っていた。この世の中で、いつか一度はその景色に出遇うことがある。夢は私にそれを暗示していたのだ。その暗示が今や事実となって私の眼の前に現れて来たのだ。――

波さえ遠慮がちに打ち寄せているのだから、私もなるべくなら静かな足取りで、ゆっくりと、盗むが如く歩いて行きたかった。が、どういうわけか私は妙に興奮して、海岸線に沿うた街道を、急ぎ足で逃げるが如く歩を運んだ。周囲の物象があまりしーんとしているので、何だか恐ろしかったのでもあろう。うっかりしていると、自分もあの磯馴松や砂浜のように、じっとしたきり凍ったようになって、動けなくなるかも知れない。そうしてこの海岸の石と化し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com